

特別支援学校における「学び合いの場」の実践 —コーディネーターの役割に焦点をあてて—

[本研究の目的] 本校の高等部と中学部が協力して行う「学び合いの場」の
校内**教員への影響**と**コーディネーターの役割**について検討する

本研究は令和5年に本校において行った
「校内にある教育資源活用を試みた「学び合いの場」の実践」を引き継ぐものである

「学び合いの場」生徒が苦戦している状況に関して、教員で検討する参加が自由な場

[研究方法]

- 対象 「学び合いの場」2回分の実践と記録
「学び合いの場」に参加した教員のべ16名（第1回10名、第2回6名の振り返り）
- 内容 「学び合いの場」とその参加者との個別の振り返り（インタビュー）を交互に実施する
報告者がコーディネーターとなって、「学び合いの場」を進行する

[結果]

| | 第1回 | 第2回 |
|---------------|---|--|
| 参加者 | 高等部7名、中学部3名 | 高等部6名 |
| 上手いかなかったこと | ①全参加者に発言の機会を設定することができなかった ②生徒の検討を継続するために必要な次回開催の日程を調整してから会を終えることができなかった ③遅れて参加してきた教員に対して、これまでの話の流れを説明する機会を設定しなかった | ①「学び合いの場」の開始までに検討の対象となる生徒を選定していなかったこと ②苦戦状況の報告を行う際、担任が1人で報告を行うと質問や意見がその1人の教員に集中してしまうこと ③苦戦状況の報告を受ける際、学年毎に区切って進行することをしなかった |
| 学び合いの場 反省点 | ④ケース会議と雑談と、最終的にもっていきたい方向性が少し不透明だった ⑤参加者全員が発言できるように進行することは、この様な場において重要な点だと思う ⑥呼び出された側の人数が極端に少ない人数だと、どうしてもお客さん思考になってしまう | ④検討と言うよりも、事実を確認した時間になっていたと感じている ⑤重要度の高い生徒対応については同じ次元の情報を教員全員が持つ必要がある ⑥目的がない事で、職員室の談笑の延長線上の様な検討になってしまう ⑦状況が固定化されている様なケースには、発言しても良いのだという十分な安心できる雰囲気が必要だと感じる |
| インタビューより | | |

[考察]

- 新しくチームに入った教員が新しい視点で意見をすることは、お互いを援助し合うことにつながる
- コーディネーターが「相互コンサルテーション」を促進させることで、参加者は「援助者としての成長感」を感じられるようになる
- コーディネーターは、参加者が自由に意見を言い合えるように場をコントロールする役割がある